

範馬刃牙がハルケギニアを召喚しました

いぶりがっこ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

(「～～～ツ!? ゼ、ゼロの使い魔ツ！ くぎゅうううう……じゃないツ!?
クロスオーバー？ ここまで全部妄想ツ!? なんと言う筋肉ツツツ!!
ギヤグ？ アンチ？ しかもマルチ……Arcadiaで見たツ!!
止められない、開始まつてしまう—— 間に合わ……謝罪！ 今ツツ！）

目 次

ルイズのお約束が帰ってきたツ ようや
くお出ましかツ チャンピオンツツ
俺達は宇宙の果てのどこかにいる神聖で
美しくそして強力な君を待っていたツツ
範馬刃牙の召喚だ——ツ

ルイズのお約束が帰ってきたツ ようやくお出ましかツ
 チヤンピオンツツ 僕達は宇宙の果てのどこかにい
 る神聖で美しくそして強力な君を待っていたツツ 範馬
 刃牙の召喚だ——ツ

——ぞわり、と。

ほの暗い電灯の下で、何かが揺らめいた。

暗闇を凝視する鮎川ルミナの背中から、どつと汗が噴出す。

(——俺、鮎川ルミナは、この地下室でバキさんのトレーニングに付き合うようになつて
 から、

様々な現象モノを観てきたツ!)

(——体長2mの大蠍螂が現れた時は、本気でバキさんが捕食されてしまうかと思つた)
 (——同サイズの『師匠』相手に編み出されたアシダカ軍曹拳は、

2 ルイズのお約束が帰ってきたッ ようやくお出ましかッ チャンピオンツッ 俺達の果てのどこかにいる神聖で美しくそして強力な君を待っていたツツ 範馬刃牙の召喚ツ

きつと俺の中で、一生忘れられないトラウマになるだろう……）

（——松尾象山館長が現れた時は、なかなか帰つてくれなくつて

結局バキさんを戸板に乗せるのを手伝わされるハメになつたつけ……）

（——エア美食俱楽部にエア味噌汁で挑んだ時は、

エア京極さんがエアボロ泣きして凄くカオスだつた）

（けどツツツ！ 今日のこの体験は、今までのどんな現象より……ツ!?）

「……よう、ルミナ、何か見えるか？」

「何かつて……、でつかい門だよツ！ バキさんツ!!

バキさんにだつて視えてるんだろツ!？」

——そう、巨大な門であつた。

どうやつてこの地下室に収まつたのかも分からぬ、日本家屋風の巨大な門。堅牢な鋼の枠に縁取られ、X印に打ち付けられた戸板と大仰な門、

更に無骨な南京錠と、頑丈な鎖で雁字搦めにされた、禍々しき大門であつた。
(まさかこの年齢で、護身が完成してしまつなんてツ!?)

「だよなあ、やつぱりこれつて『ゲート』だよな。

空中に浮いてさえなけりやあ、ただの鏡に見えるんだが」

「……えつ？」

きよとんと、ルミナが振り返る。

もし今日、渋川先生が用事で近所に来ようとしても絶対に辿り付けないであろう禁断の門。

それが刃牙の瞳には、何やら別の物に映つてゐるようであつた。

「……へつ、イーバルディの勇者の伝説に、素手ゴロで挑んでみるつてのも面白いかもな！」

「あの、バキさん、何を？」

「もし、俺の留守中に親父が來たらさ、

冷蔵庫の中のモン、適当に調理して食つとけつて伝えといてくれ、

傷んじまつたら勿体無いからさ」

「くくくくツ！ つて、バキさ……」

言うが早いが、刃牙が門の中へと消える、鼻歌でも歌わんばかりの陽気な足取りで。

強大な門がゆっくりとただの壁に戻つていく様を、ルミナはただ呆然と見送るしかなかつた。

——徳川邸。

「……なるほどのう、つまりルミナ君、君が見た所では、『範馬刃牙はリアルシャドーでのトレーニング中に、自分で創造^{つくり}った門の中に消えた』と、言うのじやな？」

「はい……」

「フム、にわかには信じがたい話じやが、

まさかあ奴の妄想が、そんな強力なレベルにまで達しておつたとは……」

地下闘技場チャンピオン失踪す。

驚くべきニュースを前に、奪われた最愛の戦士を取り戻さんと動き出した徳川老人であつたが、

唯一の目撃者、鮎川ルミナからもたらされた情報は、あまりに突飛なものであつた。

「しかし、それだけの情報ではバキを追うのは不可能じやの。

事件の時、奴は一体なにをイメージしておつたんじや……？」

「バキさん、先日の松尾館長との敗戦がショックだつたみたいで、

リベンジの為に強豪たちと手合させしておきたいつて、色んな小説を乱読しているようでした」

「その中に、今回の事件の原因があつた、と？」

「ええつと、その……、こんな本が、地下室の隅に落ちていました」
言いながら、ルミナが一冊の文庫を差し出す。

その小説を手に取ると、徳川は珍妙な目つきで表紙を読み上げた。
「ヤマグチノボル著・『ゼロの使い魔』??」

ワアアアーツ

「若き王者がようやくやってきたツツ」

「何時まで待たせる気だつたんだツ チャンピオンツツ」

「俺たちは君の大冒険を待つていたツツ」

「範馬刃牙の召喚だ」

バツキ バツキ バツキ バツキ バツキ バツキ バツキ
バツキ バツキ バツキ バツキ バツキ バツキ バツキ
バツキ バツキ バツキ バツキ バツキ バツキ バツキ

・ · ·

(夢……)

呆然と、桃色頭の少女が呟く。

(これをいつたい、どうやつて信じろつていうの)

可憐な唇がわずかに震える。

メイジのプライドと進級の危機を背負い、裂帛の気合で臨んだサモン・サーヴァントの儀式。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの前に現れたのは、全身に数多の傷を負った、トランクス一丁のムキムキマツチヨマンであつた。

「ぐぐツツ!! ル、ルイズが変態を召喚したぞオ——ツ!?

「な、なんちゅう体してんだ!?」

「どこかの先住民ツ!?

「もしかして新手のオーケかツ!?

半径2メイルの空間がグニヤリと曲がり落ちんばかりの違和感を放つ謎の男の登場に、

たちまち周囲が喧騒に包まる。

一方、騒ぎの中心の男はと言えば、

こちらも興味ありげに周囲をキヨロキヨロと辺りを見回している。

「ぐぐツツ!! 青い空、二つの月、そして魔法学院——完璧ツ!

あつちはキュルケ、タバサ、それにギーシュ……つかシルフィードでつけえツツ!?

モグラ臭さまで……現実！ バーチャルリアリティなんて目じやないツツ!!

俺の……、俺の妄想はツここまできたのかツツ（リアル
アメージュ）

「ア、アンタ一体……」

「ン？」

「ひつ！」

耳元で聞こえた声に、思わず刃牙が過剰な筋肉アピールで応える。

あつ、と自らの格好に気付くも、時すでに遅し。

二人の恋のヒストリーを始めるべきヒロインが、パタパタとハゲ教師の下に逃げ去つていく。

「……そういうや、親父にもコーディネイトについて説教された事があつたつけか？」

ハハ、我ながら進歩がないや

もしこの有様を父親が目撃していたらどうなつていたか？

第三次超親子喧嘩 in ハルケギニアでしよう。

物語が別の方に向に進まなかつた僕倆に、刃牙が密かに感謝する。

「お願ひです！ ミスター・コルベール、もう一度召喚させてくださいツ！」
（ミス・ヴァリエール、お気持ちは非常に分かるのですが……）

（つていうか、ルイズ、アニメの声まんまなんだな。）

あつたこともない架空の人間まで完全に演じ切るなんて、流石はプロ……！）
望外の異郷の地で、刃牙が釘宮理恵の職業意識の高さに感服する。

尤も、目の前のもの全てが彼のイメージであるならば、
ルイズの声がアニメ準拠であるのも当然なのだが。

「……感謝しなさいよね、こんな事普通なら、蛮人になんてしないんだから」

「——おわツツ!?」

「五つの力を司るペントゴ……キヤアツ!?」

ぼんやりとした意識の隙間を突かれた。

刃牙が我に返ったとき、既にルイズの唇は目と鼻の先にあつた。

とつさに『師匠』の技を借りて脱力、刹那、爆発的な加速を伴つて10メイルほど後
方に逃れる。

土塊が瀑布の如く巻き上げられ、煽りを受けたルイズが派手にひっくり返る。

「なッ、何すンのよアンタツッ！ て言うか本当に平民なのツ!?」

ルイズ必死の抗議も、今の刃牙には届かない。

少女が見せたポテンシャルの片鱗を前に、冷たいものが一筋、その背を走る。

(……キスが来るつて、理解つてなければ回避せなかつたツ

これが、これがルイズ・フランソワーズ……ツ！）

驚きの色を露にしつつ、刃牙が本能的にファイティング・ポーズを取る。

余りに要領を得ない使い魔の言動に、ルイズが地団太を踏む。

「何やつてンのよアンタはツ　いいからこっちに来なさいツ！」

「…………」

「……ちよつと、何よ？　ホントに闘^ヤる気……なの？」

「……アレ？」

何事か違和感を覚えた刃牙が、構えを解いて近づいてくる。

突然の虚をついた行動に、思わずルイズが半歩後ずさる。

「な、なによアン……」

「少し黙つてツ!!」

「——ツ!?」

いきなりの大声を受け、ルイズが、いや、居合わせた生徒たち全てがビクンと固まる。

刃牙はジロジロと嫌疑の目を向けたまま、ルイズの周りをゆっくりと一周した後、ハツと大きく目を開き……、

「——ツツ!?　こ、これがア——ツ！」

「んなツ!？」

「ぺたーつ

と、ルイズの胸部を大いに撫で擦つた。

「／＼＼＼＼＼＼＼ツツツツ!!?」

「ああ……、やっぱ、俺のミスで……」

「——ツツツ アンタ、いい一体何やって……!」

「スンマセンでした——ツ!!」

我に返つたルイズの激情が爆発するまさに瞬間、先を取つた刃牙が深々と頭を下げる。

斜め45度、圧倒的誠意に満ちた謝罪を前に、ルイズの怒りが空回る。

「さつきから何なのよアンタはツ!、

貴族のその……、きよ! 胸部を撫で廻したりなんかして、タダで済むと思つてんのツ!?

「違うんだミス・ヴァリエール……、俺のイメージが未熟だつたばっかりに、

今のが貴方は本来の怒りを發揮できていないんだ

「ハアツ!? イ、イメージ??」

「今のが貴方には理解らない事だろうけど、

『本物』のルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは、

今よりも更に……『胸が小さい』ンだツ！」

「…………ツ!? フ、フザけんじやないわよツツツ!!

私もツ この胸もツツ 全部『ホンモノ』のルイズ・フランソワーズよツ!!

「全ては俺の、イメージの練り込み不足が原因……、

原作で時たま発揮されていた爆発力が貴方に足りないのも、俺の力不足の所為なん

だ」

「……ツ！」

「だからミス・ヴァリエール、すまないがもう一度、最初から創造り直させ…………て…………？」
ビクン、と、

唐突に凄まじいばかりの殺気を浴びせられ、刃牙の五体が跳ね上がる。
目の前の少女に宿る巨大な獣が、鎖を喰い破つて咆哮を上げる。

「…………ツツツ!!」

圧倒的な『死』の気配を前に、刃牙は己の過ちに気付いた。

間違っていたのは胸の大きさではない。

彼女が真の怒りを発揮するには、

単純に、原作の主人公のようなミラクルが足りなかつただけなのだ、と……。

・

ゴギヤ、と――。

鈍い打撃音がトリステインの空にこだまする。

突然の修羅場に巻き込まれた学生達は、声一つ上げる事もできずその場に立ち尽くしていた。

気付いた時、ルイズは音も立てずに男の射程圏内に入り込み、刹那、キンタマを蹴り上げられた平民が宙を舞っていたのだ。

「～～～ツツツ!? ……うあツツツ……おえうぎ……ツツツ!!!!」

声にならない声を上げ、股間を抑えた平民が泡を吹いて頭から地面に崩れ落ちる。

たちまち周囲にシンクロニティが生じ、そこかしこで男子一同が内股で息子を抑え始める。

中には既に意識を手放してしまった者すらいる。

「ちよ、ちよつとみんな、どうしたつて言うのよ？」

自分の股間が蹴られたつてワケでもないでしょうに『

「……ツエルプストー、君はせがれの激痛イタみを知らないから、

そんな、涼しい顔をしていられるン……だ』

額の脂汗を拭いながら、かろうじてギーシュが呻く。

フン、とキユルケが鼻を鳴らす。

「理解はしているつもりよ。

金的は殿方にとつては絶対急所……、でしよう？」

「そう、『急所』だ、だが……、そんな簡単な言葉で片付けてしまうから、

世のレディ達は物事の本質が理解できない……！

いいかい、『睾丸』は、『内臓』なんだツツ!!』

「――！」

「心臓や、肺や、脳みそや、肝臓、腎臓と同じ……ツ！」

そんなデリケートな器官が、薄皮一枚で下界に曝されている……。

ツエルプストー、もし君の股間に心臓がぶら下がつていて、

それを本気で蹴り飛ばされたら、君はどうなるツ!?』

「タ、タイヘンな事になる、わ、ね……」

「世の女性の多くが、その事実を理解ろうとしない。

だからツ 往々にしてこのような悲劇、が……！」

そこで言葉は途切れ、ギーシュも昏倒する。

大きくため息を吐いて、キルケが戦場を見つめ直す。

「……だとしたら、これで決着。

あの平民の使い魔は、すでに再起不能……よね？」

「……いいえ」

ギーシュの説明に蒼ざめていたタバサが、大粒の汗を拭つて異論を挟む。

「決闘が続くかどうかは、崩れ落ちる時の容貌カオで理解する……。

あの平民、睾丸を全力で蹴り上げられながら…… 笑 つ て い た ……ツ！」

（こ……ツ これだア～～～～～～ツ!!）

股間に爆ぜる激痛の渦にのたうち回りながら、刃牙の脳味噌が歓喜の声を上げる。震える全身に力を込め、生まれ立ての小鹿のようにプルプルと立ち上がる。その眼前に、突如少女の黒い靴底が迫る。

(――ツツ なんて雄大なツ まるで全盛期の斗羽さんツツ)

ハネ上げられた視界の先で、二つの月がキラリと光る。

喜んでばかりもいられない。

即座に体勢を立て直さなければ、何も出来ないままにこの時間が決着オワつてしまふ。

ただち腰を落とし、大股を開いて踏みとどまる。

その鼻先に光速の左が飛び、たちどころにバキの顔面が爆ぜる。

(――ツツ!! 全盛期のアイアン・マイケルより早いツ)

風を卷いて踏み込んできた少女の右掌底が、的確に刃牙のアゴを打ち抜く。

(全盛期の金竜山より重いツツ)

大脑をシエイクされ、再び崩れかかった体が、左のミドルでくの字に跳ねる。

(全盛期のデントラニー・シットパイカーよりも鋭いツツ)

歴戦の地下闘技場戦士達をも凌ぐ少女の連撃に成す術もない。

ボロ雑巾のように打たれながら、刃牙が、自らの目に誤りが無かつた事を確信する。

(スゲエ……凄エや……ツ これが……ギャグパートの時のルイズ・フランソワー
ズツツ!!)

・ ・ ・
——強いんだ星人。

地上最強を自負し、己の肉体のみを頼りに太陽系第三惑星地球を渡り歩き、
ひとたび出会つてしまえば、路上だろうと遊園地だろうと夜の公園だろうと電話ボッ
クスだらうと

所構わぬ闘争を始めるハタ迷惑な超雄の総称である。

彼らの日常は、その全てが最強に帰結する。

仕事中でも家事の際でも寝ている時も風呂の中でもクソしている時でも女を抱いて
いる時でも、

彼らはただ、強くなる事だけを考えている。

例えは週刊少年チャンピオンを読んでいる時でさえ、彼らはこう考える。

——山田の柔道は、地下闘技場ならどこまで通用するのか?
——散さまのトルネード螺旋、自分ならどう捌くか?

——グーより強いチョキは、現実に存在し得るのか?

——全盛期の火竜閣 対 4tトラック、勝つのはどちらか？

——海中でイカちゃんと出会つてしまつたら、どのように闘えばよイカ？

そして、いつしか彼らは漫画や小説の中に、一つの『最強』の形を見出すようになる。それが、ギャグ回の時のヒロイン!!

例えば、全力のシティハンターと、100tハンマーを担いだ槇村香が対峙したならば、

果たして勝つのはどちらであろうか？

地球人同士の会話ならば、それは酒の席での戯言に過ぎない。

だが強いんだ星人の中には、現実世界の物理法則すら捻じ曲げる想像力を持つた超雄が存在する。

——そしてその日、超雄・範馬刃牙は一冊の小説と出会つた。

タイトルを『ゼロの使い魔』と言つた。

・

時間にすれば、わずか30秒にも満たない攻防に過ぎない。

だが、その中で男は反撃の術を失い、^{ウケ}防御する事も倒れる事も叶わぬまま、
ただルイズの連撃で操り人形のように踊り続けるのみとなつていた。
「……ヴァリエールは、いつまで続行けるつもりなの？」

あのままでは、本当に童貞を捨てる事になりかねないわ

「あるいは、それが、再召喚が彼女の狙いなのかも……」

「なんですってツ!? それじゃあ、早く止めないと……ツ」

「やめんかバカ者、折角の名勝負をフイにするつもりか?」

「——!?

突然真横から聞こえた声に、キュルケとタバサが振り向く。

そこにいたのは、黒髪のショートカットが映える使用人の少女、シエスタ・モ・ト
ー
ヴエ。

そして蓬髪に不精ヒゲと言う容貌にただならぬ眼光を宿した、浮浪者風の堪らぬ男で

あつた。

「名勝負……って、どう言う事なの、おじいちゃん？」

私にはただ、使い魔さんが一方的に打たれているようにしか見えないけど……？」

「青いなシエスタ、確かに一見、一方的に攻撃を受けているように見えるが、その実、刃牙くんのダメージはゼロに等しい」

「いや……、アンタら何者よ？」

しかし、ホームレスの言う事には一理あつた。

ロブ・ロビンソンもかくやと言うハイキックが炸裂する。

刃牙が空中で一回転し、スタリと大地に着地する。

ラベルト・ゲランも裸足で逃げだすようなアッパーがアゴを打ち抜く。

刃牙が後方に一回転し、何事も無かつたように大地に降り立つ。

「あれは……シャオ

「消力だツ！」

敵の攻撃を回避するでも、ましては防御するでもなく、

ベクトルのコントロールで完全に殺してしまう。

しかしあれは、中国拳法の歴史の中でも一つの極地と言われる幻の技術ツツそれを実戦レベルで使いこなすとはツ やはり彼は本物なのかツ!?」

「いや、アンタが何者なのよ」

タバサの台詞を遮る完璧な解説ぶりに、キュルケが思わず舌を巻く。
ともかく、これで意味不明の事態に遭遇するリスクはなくなつた。

「でもおじいちゃん、ルイズさんの無呼吸連打を捌くだけでは、反撃に移る事はできない
わ」

「シエスタよ、こう言う時に追い詰められているのは、攻めている側の方だ。

あの平民……、刃牙くんは二つのチャンスを狙つておる。

一つはあの少女から距離をとれるタイミング。

そしてもう一つは彼女の焦りが生み出すであろう大振り。

二つのチャンスが交わつた時、必然的に導き出されるものは……」

「——カウンターッ!」

(……)のツ タイミングでツツ)

水月への強烈な前蹴りが繰り出される。

その威力を宙に舞う蝴蝶のように受け流しながら、刃牙が2メイルほど後方に跳ぶ。
ズンツと大地を踏みしめ低く腰を落とす。

一撃必殺の拳、剛体術。

刃牙の全体重を乗せた一撃が心臓に叩きこまれたならば、瞬く間に勝敗が決するであろう。

——だが。

(……追撃が、来ない……ッ)

不審に思つた刃牙が顔を上げる。

刹那、その全身が総毛立つ。

彼が目にしたのは、背中からゆっくりと乗馬用の鞭を引き抜くルイズの姿であつた。

ビュン、とルイズが鞭を振るう。

パン、と言う乾いた音が中空に炸裂し、一足遅れの衝撃波が少年の肌をビリビリと掠める。

(罵……ッ！ 距離を取りたかったのは、むしろ彼女ツツ！？)

鞭打……ッ　来るッ　今……ッ　回避せ……ないツツ

防御……られないツツ　耐えツ耐えるしかなツツ）

——パンツツツツ！！

!!!!「
叫びにならない叫び声を上げ、左腕を抑えた刃牙がもんどりうつて大地を転げまわ
る。

「
~~~~ツツ!

その手があつたかッ！ ルイズ・フランソワーズツツ!!

やはり彼女は天才だッ!!（やはり彼女は天才だ）

「ど、どう言う事？

今まで何の手応えも無かつた打撃が、なんで突然通つたのツ!?」

「あれは、べ……  
鞭打だッ!  
！」

あれは肉体にダメージを与えるためではなく、人間の皮膚を走る痛覚を直接責める為  
の技術ツツ

どれほどブ厚い筋肉の鎧を纏おうともツ

皮膚を『ピシヤリ』と張られた時の激痛みは老若男女等しく平等ッ!!  
し、しかも今のは音はツ、皮膚を張つたためではなく、

音速を超えた鞭の先端が、空気の壁を突き破つたために生じたものツツ  
当てない打撃……ツ あれでは消力の使用<sup>ツカ</sup>いようが無いツツツ』

「ナンデモシットルワーコノヒト」

パン、パン、と、

一切の慈悲のない鞭打が、刃牙の腹に、脚に、背に炸裂する。

その度に五体が激しいステップを踏み、悲痛な叫びを上げてのたうちまわる。  
誰の目にも、決着が近いのは明らかであつた。

——だが、

ズンツ

「ン、き、氣の所為、かしら……?」

ズンツ

「な、なんだか使い魔さんの体が……」

ズンツ

「大きく……なつてツツ!?」

いや、

居合わせた者たちが思わず目を見張る。

大地を一つ踏みしめるたび、少年の体が一回り大きくなり、その背面に鬼の形相が刻  
まれる。

「へ、変身するのツ!? まさか先住……ツ!?

「……いえ、あれはしょ

「象形拳ツ!? このタイミングでかツ!!

中国拳法の中でも、特に動物の動きを模倣し、型へ取り込んだ拳法の総称ツツツ!!

バキの体が大きくなっているワケでは無いツツ

我々は今、彼が模倣している生物のイメージを目の当たりにしているのだツ!!

何と言う技の完成度ツ ……だが、一体、今更何の獣をツ

「……ショボーン（—・ω・—）」

(感謝する、この素晴らしい原作との出会いに)

——力強く踏みしめる少年の脚が、丸太のように膨らんでいく。

(感謝する、ルイズ・フランソワーズと言う、地上最強のご主人様に)  
 ——ぱさりと広げた両腕に、寧猛なる鉤爪が生え揃う。

(故に放つ、ゼロの使い魔と言う作品から学んだ、俺の全力——ツ!)  
 ——ズワツ、と、鬼の背中から強大な漆黒の翼が飛び出す。

「へ、平 民 が 飛 ん だ ア ——ツツツ!?」

✧ 魔 技 ・ 古 代 竜 (エンシャントドラゴン) 拳!! ✧

最早生物の概念を覆した超雄が、風を纏い一直線の巨大砲弾となつてルイズに迫る。  
 目の前の絶望に、ダラリと全身を弛緩させた少女に、反撃の余地などは……。

ふによん。

(へつ……)

ルイズが軽く首を捻る。

強大なる黒龍の右腕が、手品のようにすり抜けていく。

(～～～～ツツ 消力ツ パクら……ツ 抜けられ……罠ツ 死——ツ!?)

即座に刃牙は悟つた。

ルイズを屠るハズの黒龍の爪が、その実、猛虎の顎の前に差し出されていた事を。  
伸びきつた刃牙の右腕が、ルイズの両腕にがつちりと捕獲される。

同時に首筋を左足に絡めとられ、前方に差し出された頭部の前に、高速の右膝が迫る。  
ニーソックスを纏つた漆黒の膝。

その脇からちらりと除いた下着の白さを、彼は生涯忘れる事はないだろう。

……直撃の瞬間、はつきりと【死】を意識したからだ。

ぐしゃあ

——少女の膝が弧を描いて突き刺さり、刃牙の顔面が陥没する。

吹き上がる血飛沫、白色に染まる世界の中で、二つの月がキラキラと瞬く。

(嗚呼……)

刃牙が呟く。

敗北を迎えた若者の胸に去来したのは、溢れんばかりの尊敬であつた。

(スゲエ……、凄エよ、平賀才人……)

ぐつ、と右腕を天空に捻り上げられる。

必然的に刃牙の視線が大地へと移る。

(一人の漢<sup>オトコ</sup>として尊敬する……、アンタ……!)

断頭台の如く、ルイズが左膝に全体重を預ける。

刃牙の頭部が高速で大地に近づく。

(……)こんな凄い超雌<sup>ヒトコ</sup>と、闘争してたんだ……!)

——虎王完了——

——誰も、声を上げる事はできなかつた。

どれほどの時間が経つたのだろう。

あれほど強大であつた漆黒のドラゴンも、いつしかただの平民に戻り、地に伏していた。

ルイズ・フランソワーズはしばらくの間、恍惚として中空を見つめていたが、  
やがて、汗と血にまみれた薄桃色の髪をかき上げて、言つた。  
「……もう一度、召喚させて下さい、ミスター・コルベール」

範馬刃牙失踪の報から半日。

徳川邸では、急報を聞いて駆けつけた『強いんだ星人』たちが、  
用意された単行本『ゼロの使い魔』20巻の山の前で激論を続けていた。

——さて、皆の衆、

残念ながら、これまで原作を読み解いて来た通り、

こちらからハルケギニアへのゲートを開く事は不可能なようじや

「…………」

「そこで、後はもう、バキが自力で生還するのに期待するとして……、

あヤツが原作のどこまで戦い抜けるか、トトカルチョでも開こうではないか！」

徳川老人の能天気な言葉に、『武神』が禿頭をつるりと撫でる。

「最初の相手は、このギーシュとか言う坊ちゃんかい？」

へつ、青銅じや試し割りにもなりやしねえだろうよ」

「じゃが、この『バーエム』とか言うの、第一巻で闘るにはちいとデカすぎやせんか？」

『達人』が眼鏡を前後させながらそうボヤく。

「……トリケラトプス拳がある、土くれ如きじや止められんでしょう」

言いながら『超A級喧嘩士』がワイルドターキーを一気に煽る。

「まあ、やつぱり二巻で詰みじやないですか？」

剣と魔法の達人が五人がかりで飛び道具とか、さすがに素手じやあ、ね

『空手界のリーサル・ウェポン』が、隻腕を大げさにひらひらさせる。

「ゴキブリダッショから金的、その間、実に二秒ツッ！」

彼はそう言う事を平然とやつてしまふ男だツ！」

『魔拳』がツンツンしながら叫ぶ。

「それじやあタルブ戦……、つか、これもう戦争じやねえかツ！」

『神心界のデンジヤラスライオン』が、たらりと冷や汗を流す。

「この戦闘は、覚醒したルイズが敵旗艦を射程に捉えれば勝利と言ふ特殊条件付き。

制空権もワルドとの決着も実は関係ない。

彼がそこまで原作を読み解いていれば、十分に勝機はある

『環境利用闘法師範』が、天井から降りてきて答える。

「あの……、ヘクサゴン・スペルは、いくら刃牙さんでも」

強いんだ星人たちに囲まれたルミナが、肩身狭そうに呟く。

「ゴキブリダツシユからのハイキック、その間、実に二秒ツ!! それでこそ範馬刃牙だツ  
！」

『魔拳』がデレデレしながら叫ぶ。

「……と、なると、やはり対七万人戦がネックかのう？」

実際、平賀少年もここでギブアップしておる所じやし……」

徳川老人のまとめに、全員が頷きかけた、まさにその時……、

『クックツク……、ムサツ苦しいのが集まつて何をやつてるかと思えば、  
歴戦の兵共も落ちたもんだなア!!』

「「「～～～～～ツツツ!!」」

唐突に室内に溢れた殺気の渦に、強いんだ星人たちの視線が一箇所に集まる。  
果たして座敷の上座には、いつの間にかワープしてきた鬼オーラが、

ハンドポケットの仁王立ちで陣取っていた。

今頃は世界各地のGPSが大いに乱れ、余計な二次災害が発生している事だろう。

「ゆツ、勇次郎オツツ!?」

「大の男どもが何をやつてるかと来てみれば、ラノベ片手に最強談義だとオ～?」

……エフツ エフツ エフツ アハツ!

アハハハハハハ!!! ハハハハハハハ アハハハハハツツツ!!!

「…………ツツ!?」

「片腹痛いわツ!! 中学生か貴様らツツツ!!!」

「～～～～ツ!?」

「――!」

「…なツ!?」

「…、あ、あツ!!」

((((アンタの息子の為にやつてるんだろうがツツツ!!!!)))

突然の剣幕つぶりを露にするオーガに対し、全員が心の中で突つ込む。

だが、誰一人それを口に出す事はできない。

強さというものを『ぶつちやけワガママを貫き通す力』と定義するならば。  
彼はまさに地上最強に最も近い男であった。

「……し、しかしじやなオーガよ、  
んじや。

このゼロの使い魔と言う作品は、長期連載の中でどんどん展開がインフレ化していく  
いかにお前さんでも、ヨルムンガントの大群やエルフの先住、虚無の威力に適うかど  
うか……？」

「ホウ……？」

ピシリ、と勇次郎の額に筋が走り、室内がグニヤリと歪む。

徳川は即座に自らの失言を呪つた。

「いいだろう、貴様らのお遊戯に、ちょっとだけ付き合つてやるぜ」

直後、勇次郎の上半身が爆ぜ、破れた衣服の間から、その背に鬼の形相が宿る。  
ゆらり、勇次郎が歩を進め、テーブルの上の文庫を一冊、

両手の親指と人差し指でつまみ上げ、顔の前へと持つてくる。

数瞬の間、そして――！

✧ 邪ツツ ✧

「「「あああああああアアアアアアアツツツ!!?」」

——刹那、バリイツと音を立て、真つ二つに破れた文庫が、ボトリと畳の上に落下した。

……一同が、声一つ立てられずに固まる中、

勇次郎はゆっくりと顔を上げると、満面の笑みを作り、こう言つた。

「……なつ？」